2017.7.25

博物館 Dictionary No.201

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

特集展示「京博すいぞくかん～どんなおさかないるのかな?～」に展示されている作品について勉強してみよう。

魚を横から見る

みなさんは水族館に行ったことがありますか？京都国立博物館に一番近い水族館は、京都駅の西、梅小路公園のなかにある「京都水族館」です。特集展示「京博すいぞくかん」は、この京都水族館と一緒に準備をしました。

「京博すいぞくかん」で展示される作品には、たくさんの魚が登場します。水の中をすいすいと泳ぐ魚たちは、とても気持ちがよさそうです。色々な作品を見比べていると、あることに気が付きます。それは「どこから見た魚を描いているか」が、それぞれ違うということです。

まずは室町時代に描かれた「藻魚図」（図１）を見てください。大きな魚（カワヒラ）は、横から見た姿です。小さなナマズは、白いお腹が見えているので、下から見上げているように感じます。つまり、水の中から見た視点で描かれているのです。この絵を見ていると、まるで自分が魚になって水中を泳いでいるような気持ちになります。

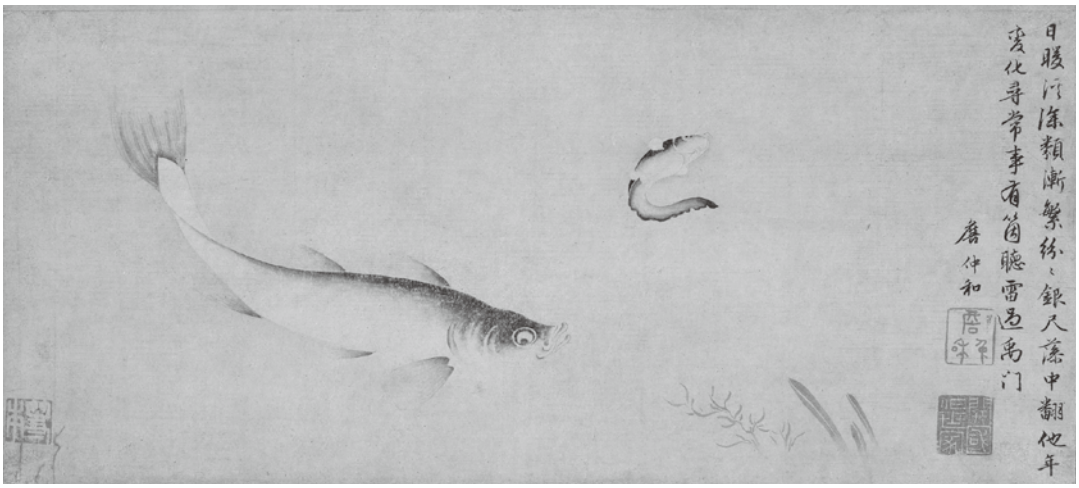

図１　等本筆　詹仲和賛「藻魚図」京都国立博物館

つぎは明治時代に描かれた「遊鯉図」（図２）を見てみましょう。この絵は横幅が２メートルもある大きな絵です。水面にできる波紋が描いてあり、コイの背中が見えるので、地上から池の中を覗き込んでいるように感じます。でもよく観察すると、横から見たコイや、小さなフナの姿も見えます（図３）。この絵は地上から見た景色と、水の中から見た景色、両方を組み合わせて描かれているのです。人間の視点と、魚の視点の両方を楽しむことができますね。

水の中にいる魚を、昔の画家たちはどうやって描いたのでしょう。池や川、海の中をのぞいた時のことを思い出してみてください。波のない透き通った水なら魚の姿を見る

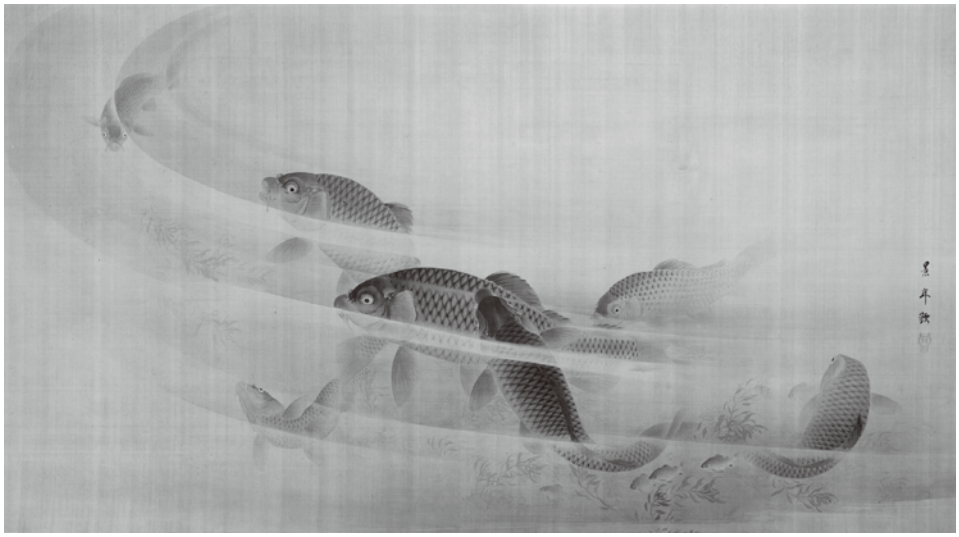

図２　今尾景年筆「遊鯉図」京都国立博物館

ことができますが、上からのぞくだけでは魚の背中しかみえません。それに人間が近づくと、たいていの魚はすばやく泳いで逃げてしまいます。魚は、動かない木や花、地上にいる動物と比べて、描くのがとても難しい相手です。昔の画家はきっと、水の上から目をこらして魚を見たり、釣り上げた魚を目の前に置いていろいろな方向から見たり、上手な絵をお手本にしたりと、さまざまな苦労をして魚を描いたのでしょう。

図3　今尾景年筆「遊鯉図」（部分）京都国立博物館

現代に生きる私たちは、水族館に行けば好きなだけ魚を観察することができます。水族館には大きな水槽があって、魚が泳ぐ姿を、なんと真横から見ることができます。「泳いでいる魚を横から見る」というのは、実は特別な体験なのです。ガラスやアクリルなどの透明な素材でできた水槽があるおかげで、私たちは、びしょ濡れになったり息を我慢したりすることもなく、魚と同じ目線で水の中を見ることができます。

そんな特別な体験ができる水族館は、いつごろ日本にできたのでしょうか。今から135年前の明治15年（1882）に、東京の上野につくられたものが日本で最初の水族館だとされています。まだ水族館という名前はなく、「観魚室（うをのぞき）」と名付けられました。レンガでできた建物で、部屋の片側にガラスでできた水槽が並べられました。部屋の中には照明がなく、水槽には外の光が差し込むようになっており、訪れた人は、暗い部屋から窓の向こうを見るように、光が差し込む水槽を眺めたのです。はじめは海の魚の飼育が難しかったので、川や池など淡水のいきものだけでした。関西では、明治28年（1895）に京都市の岡崎公園で博覧会が開催された時に、ウナギやコイ、フナなど琵琶湖の魚を展示する施設がつくられました。今の私たちからすると、身近な魚ばかりで地味な展示のように感じますが、はじめて水中世界をのぞき見る体験をした当時の人たちは、きっと新しい世界の扉が開かれたように、ワクワクしたに違いありません。

「京博すいぞくかん」に展示されている作品の多くは、実はこうした「水族館」が誕生する前につくられたものです。水の中をのぞき見るのが難しかった時代に、人々はどんなふうに水の中を描こうとしたのか、また、水の中にどんな世界を想像してきたのか、過去に思いを馳せながら作品を見ると、新しい発見があるかもしれません。

教育室　研究員　水谷亜希

印刷・富士印刷社